

角田の生目八幡

角田にある角田八幡神社を知っておるかの。そうそう、中村のインターを下りた道のすぐそばにあるお宮さんじゃ。宇佐八幡の神様を分けてまつてあるので、拝殿や本殿は宇佐八幡とおなじしゅぬりで、なかなかのおもむきのあるお宮さんじゃ。

その角田ん八幡様の横に小さな社があるんじゃが、その社は「生目八幡」とも呼ばれておつてな。なんで「生目」というおかしな名前なんか、不思議に思っじゃろうな。それには、こんな話が残っておるのじゃ。

いつのころかのう、もう八百年も昔になるじゃろうか。角田八幡神社に徳の高い神官さんがおられての、たいそうな評判じゃった。なんでも、海をわたろうとされると海ん水が一気に引いて陸になつてしもうたり、裏を流れる角田川をわたろうとされると石が現れたりで、まるで仙人のような人物じゃったとか。

ある日のことじゃった。信心深い年老いた村んもんが、この神官さんのとこにやつてきて、

「神官さまお願いがありますのじゃ。わしやもう九十の坂をこえようつしちよるけど、この世の最後に、一度でええからお宮のご神体を拝ましてもらえんじやろうか。」



とたのんだ。

「ご神体というのはな、神様の心が宿ったもので、ご神像であったり岩であったり木であったりするんじゃない。ふだんは本殿のおくにまつられておってな、人の目にはふれんようにとびらがしっかりと閉められておるんじゃない。」

「そうじゃな、しかし、このご神体は人の目にふれると神通力を失うと言われているの……。」
と言いながら、神官さんは、はたと困られたんじゃない。実は神官さんも長年お宮に勤めをして来られたが、一度も見たことがなかったのじゃ。と言うのも、それには訳があつてな、代々「ご神体を見てはならぬ。」と言いつた伝えられてきた

からなのじゃ。しかし、村んもんの手前、「知らぬ。」とも言えず、また、どのようなご神体なのか説明もできず、かといつてうそもつけず……。

困つた神官さんは一人、本殿の前に座り長いこと考えられておられたが、神官さんもやはり人の子、しだいに「見たい」という心が強くなつてきてしもつて

「長い間、神様に仕えるこの私なら、見てもよいのでは……。」

と自分に言い聞かせるように、ついに神殿のとびらに手をかけられた。いっしゅん神官さんの心に、「もしや……。」という思いが頭をよぎつたが、やはり「見たい。」というお気持ちを抑えることはできんじゃないつた。ついに両の手をとびらにかけられ、ほんの少しお開けになられたその瞬間、

「あつ。」

矢のような光が神官さんをおそつたのじゃ。世の中の光をみんな集めたような光に、神官さんはこし

をぬかして座りこんでしもうた。老人は何が起こったか訳がわからん
じゃったが、神殿の前にたおれている神官さんを見て、

「神官様、すまんことをしてしもうた。わしが、たのんだばかりに……。」
と、ただただおろおろするばかりじゃった。

村中を照らすほどの光におどろいた村んもんも、何事かとかけつけて
きた。神官さんは、目をおさえた手をはなされ辺りに目を向けられた。
じゃが、するどい光は神官さんを暗いやみの世界へと引きずりこんでし
もうたんじゃ。

「ああ、私はやはり人の子、神様にはとてもおよばない存在であるのだ。
それなのにそれなのに、何とおろかな、何と高ぶったふるまいをして
しもうたのであろう……。どうか、お許してください。村の民には何
のかかわりもないこと。私の思い上がった心のなせる業でございま
す。」

神官さんは本殿にこもり一心に祈られた。大勢の村んもんも地にふしていのった。

三日三晩のいのりの朝、神官さんは、物静かな神様の声を聞かれた。

「これ、静かに目を開けて見よ。」

神官さんがそつと目を開けられると、神殿に神様があられた。

「これからも、今の気持ちをもって村人の支えになるよう努めよ。」



それだけを言うと、神様はすうっと消えてしまわれた。

神官さんが、表に目を向けられると、右の目に、神官さんの身を案じている村んもんたちの姿が映った。

「おお、何とありがたいことじゃ。この村の者たちの心こそがご神体じゃ。」

神様も神官さんの徳にめんじて右目を開けてくださったのであろうかの。それからというもの、だれもご神体を見ようとした者はいなかったそうじゃ。

神官さんが亡くなった後、村んもんは、角田八幡神社の横の小さな社にまつりその徳をしのだそうじゃ。そして、目が見えるようになったというので、後に「生目八幡神社」と呼ばれるようになったんじゃと。

(土屋富子)



生目八幡